筑波大学　地域研究29：113－127，2008　　Area Studies Tsukuba 29：113－127，2008

“来不及”型可能補語句型の成立過程

Historical Consideration of Complement structures ‘来不及’

伊　原　大　策
IHARA　Daisaku

Theoretically, the presence of the complement structures ‘来得及/来不及’in the current Chinese entails the corresponding structure ‘来及,’ but the latter is not in use. This paper deals with the prototype of ‘V及’and the birth of ‘来得及/来不及’ from historical perspective, revealing the reason why ‘来及’ does not exist.

1　はじめに

現代漢語の可能補語構造“来得及／来不及”について，その起源を尋ねようとしても，容易に古形に辿り着けない。これに対応する機能を持った結果補語構造“来及”がもともと存在しないので，途中で手がかりを失うからである。そのため，“来得及／来不及”句型の由来を明らかにするには，単に可能補語構造から結果補語構造へと語法史を遡るのではなく，機能と形態の両面に基づきその変遷過程を跡づけなければならない。

小論は，“来得及／来不及”の起源を求めて中古漢語の“Ｖ得及／Ｖ不及”にまで遡り，そこで確認できる機能と形態を頼りに更に上古漢語にこの語の原初的形態を探る。その過程において，複数の要素が“Ｖ得及／Ｖ不及”に重層的に作用し，その結果，本来存在しなかった機能がそれに付与されたために，「間にあう／あわない」を意味する“来得及／来不及”が成立したことを示そうとする。このことにより，現代漢語において，“来得及／来不及”が常用されるにもかかわらず“来及”が用いられない理由も自ずと明らかとなる。

なお，小論は，あわせて別の研究誌に発表される拙論２本と関連を持つ[1]。紙幅の制限により小論で扱うことのできない点については，これらの拙論で触れられる。

2.1　“及”を含む三つの句型

1　拙論2007および拙論2008。

“来得及／来不及”の古い用法を求めて語法史を遡ろうとすると，形態に基づく限り，近世漢語以前に行き着かない。「間にあう」という意味の“来得及／来不及”は明代にようやく発生したからである。しかし機能と形態の両面に基づきながら上古漢語にまで遡ると，関連するいくつかの句型を見いだすことができる。例えば，“V＋及”“VO不及”“及V”などである。

今，行論上の必要から，拙論2007および拙論2008で述べたことがらについて，その概略を以下に示す。

Ⅰ-a〔“V＋及”〕

“V＋及”は移動に伴う空間的到達を示し，「～にいたる」という意味を表す。

1，射人納賓，賓<u>入及</u>庭，公降一等揖之。(《儀礼》燕礼)（射人が客を迎える時，客が邸の庭にまで入ると，主人は階段を一段下りて客に挨拶する）

さらにこれが原義となって抽象的用法に拡張されることもある。

2，君貺寡君，<u>延及</u>二三老，拝。(《儀礼》聘礼)（君主が我が君を慰問され，さらに二・三人の大夫にまで慰問を続けてくれると，それに拝謝する）

しかし，この場合も空間意識が抽象的に置き換えられたものなので，それを「空間型」機能から離れたものと見なさない。また，上古漢語期は結果補語構造が未成立だった時期であるため，その内部構造に基づいて見た場合，“V＋及”は動詞連語と見るべきである。

Ⅰ-b〔“V及”〕

中古漢語期は多くの動詞連語が結果補語構造に向けて変質し始めた時期なので，中古漢語において用いられるこの句型は，動詞連語“V＋及”と同質ではなく，結果補語句型“V及”に近い構造を持つものと考えられる。

3，莫爲此女人損着府君性命，<u>累及</u>天曹。(敦煌変文〈葉浄能詩〉)（この女のために府君の体面を傷つけて天曹にまで災いが及ばないように）

Ⅱ-a〔空間型“VO不及”〕

この句型は形態的には中古漢語期以降の可能補語構造と同一であるが，上古漢語期に既に存在していた。上古漢語期には可能補語構造が成立していなかったことが確認されているので，この“VO不及”は動詞連語であると見なすのが適当である。上古漢語期におけるこの句型は空間的到達を示すので，「空間型」機能を持つと言える。

4，冬十月甲申，呉太子諸樊入郢，取楚夫人與其寶器以帰。楚司馬遠越追之不及。（《春秋左氏伝》昭公二十三年）（冬の十月の甲申の日に呉の太子諸樊は郢に入って楚夫人とその宝器を奪って帰った。そこで楚の司馬遠越は諸樊を追いかけたが追いつかなかった）

「空間型」のこの句型は中古漢語期になると補語構造に接近し，肯定形“ＶＯ得及”という形態でも用いられる。

5，屋下舉手得及，指内窠中，燕子亦出口承受。（〈宣験記〉）（軒下で〔燕の巣に〕手が届いたので，巣に手を伸ばすと燕の子も口を開けて〔餌を〕受けようとした）

Ⅱ-b〔時間型“VO不及”〕

この句型は「空間型」“VO不及”と同一の形態を持つが，機能が異なり，時間的到達を示す。また上古漢語には存在せず，中古漢語期にようやく姿を現すので，「空間型」“VO不及”と別に扱うのが適当である。形態的には可能補語否定形と同型を有し，「時間型」機能を備え，「～するのに間にあうことができない」という意味を示す。

6，僧死後，闔宅常聞經聲不絶。張尋知其冤，慙悔不及。（《酉陽雑俎》続集　寺塔記上）（僧が死んだ後，家中でいつもお経の声がずっと聞こえた。そこで張はその僧が無実だったことを知り，心に恥じて後悔するのに間にあわなかった）

7，皇帝與高力士見一條紫氣昇空而去，皇帝追悔不及。（敦煌変文〈葉浄能詩〉）（皇帝は高力士とひとすじの紫の煙が空に上がるのを見て，皇帝は〔浄能が天に去ったことを知ったので〕後悔するのに間にあわなかった）

Ⅲ〔“不及Ｖ”〕

この句型の肯定形“及Ｖ”は「～する時になる」という意味を持ち，時間的到達を示す。しかしこれに否定詞が着くと些か意味が異なる。例えば“未”によって已然の否定が示された場合は「～する時間が来る前に…する」という意味が表され，“不”によって否定形が構成された時は可能の意味をも含んで「～するのに間にあうことができない」となる。

8，生十年而喪先君，未及習師保之教訓而應受多福。（《春秋左氏伝》襄公十三年）（生まれて十年で父を失い，まだ守り役の教えを学ぶのが間にあわないうちに君主の地位を受けることになった）

9，壁壘天旋，神扶電擊，逢之則碎，近之則破。鳥不及飛，獸不得過，軍驚師駭，刮野掃地。（《漢書》揚雄伝上）（壁塁は天のように回らし，〔士卒は〕鬼神の如く笞ち，稲妻の如く撃つつので，逢えば砕かれ，近づけば破られる。鳥は飛び去るのに間にあわず，獣はその場から逃げることができず，軍隊が一斉に動くと，すべてが殺されて原野は根こそぎ掃蕩され尽くす）

小論は時間表現に関わる可能補語構造“来得及／来不及”の起源を検討するのが目的であるから，可能の意味を含む「時間型」“不及V”を考察の対象にする。

“不及V”は上古漢語に既に存在するが，中古漢語期には「間にあわない」を示す句型として多用され，定型化する。

10，漢時，会稽句章人，至東野還，暮不及至家，見路旁小屋燃火，因投宿止。（《搜神後記》6）
（漢の時代に会稽句章の人が東野に行って帰ろうとしたところ，日が暮れて家に着くのに間にあわず，道ばたに小さな家が明かりを灯しているのが見えたので，そこで宿を取った）

以上の三句型は，それぞれ肯定形に偏って用いられるものと，否定形に偏って用いられるものとが截然と分かれている。すなわち，“V＋及”は肯定形で使用され，「時間型」の“VO不及”に肯定形は存在せず，“及V”は肯定形と否定形が共に可能とはいうものの，可能を示す「時間型」で使用される時，“不”を否定詞とした否定形“不及V”が採用される。

2.2　上古漢語期から中古漢語期にかけての三句型の系譜

以上の句型について，機能ごとに分類し，上古漢語期から中古漢語期にかけてのそれぞれ使用状況を整理すると，次の表が得られる。

表1　時代別に見た各句型の使用例の分布

	上古漢語	中古漢語
「空間型」“V及”	あり（“V＋及”）	あり（“V及”）
「時間型」“V及”	なし	なし
「空間型」“VO不及”	あり	あり
「時間型」“VO不及”	なし	あり
「空間型」“VO得及”	なし	あり
「時間型」“VO得及”	なし	なし
「空間型」“不及V”	なし	なし
「時間型」“不及V”	あり	あり

注：“V+及”は動詞連語，“V及”は結果補語構造を示す。両者は同形態であるが語の内部構造が異なる。

時代を縦軸にして，機能にもとづいてこれに再整理を加えると，以下の表が得られる。

表2　時代別に見た各句型の機能の分布

	「空間型」機能	「時間型」機能
上古漢語	“V＋及”　“VO不及”	“不及V”
中古漢語	“V及”　“VO不及”　“VO得及”	“VO不及”　“不及V”

注：“V+及”は動詞連語，“V及”は結果補語構造を示す。

各機能の時代別継承性について見た場合，この表は次のことを意味する。

1，「空間型」機能に基づいて見ると，上古漢語の“V＋及”“VO不及”と連続性を持つのは，

中古漢語の“Ｖ及”“VO不及”“VO得及”である。同一句型が同一機能を継承するのは当然であるから，重複した句型を除いた上で，そこに変遷過程が存在していると想定すれば，次のように言うことができる。

「空間型」“Ｖ＋及”(動詞連語)から「空間型」“Ｖ及”(結果補語構造)が産出された。また，動詞連語としての「空間型」“VO不及”から可能補語構造に接近した「空間型」“VO不及”が発生し，さらにその肯定形の「空間型」“VO得及”が作り出された。

2，「時間型」機能に基づいて見ると，上古漢語の“不及Ｖ”と連続性を持つのは，中古漢語の「時間型」“VO不及”と“不及Ｖ”である。同一句型が同一機能を継承するのは当然であるから，重複した句型を除いた上で，そこに変遷過程が存在していると想定すれば，次のように言うことができる。

「時間型」の“不及Ｖ”から「時間型」の“VO不及”が産出された。

3，形態に基づいて見た場合，中古漢語の「時間型」“VO不及”には，その原型に相当する「時間型」の句型が上古漢語に存在しない。強いて形態上の原型を求めれば，上古漢語の「空間型」“VO不及”である。そこに変遷過程が存在していると想定すれば，次のように言うことができる。

「空間型」“VO不及”から「時間型」“VO不及”が産出された。

このことは，とりもなおさず「時間型」“VO不及”が，形態を「空間型」“VO不及”から借用し，機能を「時間型」“不及Ｖ”から取り込んだことを示唆する。つまり，上古漢語期から中古漢語期にかけて，「時間型」“VO不及”が成立する過程で，「空間型」“VO不及”と「時間型」“不及Ｖ”との間で機能の混乱が生じたことを意味する。

上の３点のうち，第１点について検討すると，上古漢語の動詞連語が中古漢語期に結果補語構造に進化し，否定形動詞連語が関与しながら可能補語構造が成立したことが既に知られているので[2]，この表が示唆するところは既知の知見に一致する。このように，第１点においてこの表の示唆するところが既知の知見に一致するからには，第２点と第３点によって得られる推測は，「時間型」“VO不及”の由来を正しく反映していると想定するに足る。

「時間型」“VO不及”は現代漢語の“来不及”の直接的な起源に他ならないので，“来得及／来不及”の成立過程を解明するには，“VO不及”と“不及Ｖ”との関係を探ればよい。

3.1　“VO不及”の語構造

“VO不及”と“不及Ｖ”は，機能が同一であるだけでなく，形態も一部で共通点を持つ。そのため，“VO不及”と“不及Ｖ”が形態と機能を互いに交流させたと想定できるからには，その共通点を媒介として両者の混合する過程が発生したと推測できる。

そこで思い起こされるのが，上古漢語における“VO不及”の語構造の緩さである。

2　結果補語と可能補語との関連については楊建国1959，潘允中1980、岳俊発1984などで検討されている。

11，壺子曰“追之。”列子追之不及。（《荘子》応帝王）（壺子は〔その男を〕「追え」と命じた。そこで列子は男を追ったが追いつかなかった）

この例はあたかも可能補語構造であるかのような形態を持っている。しかし，上古漢語には次のような例も見られる。

12，於是乎伏斧鑕，請死於王。王曰“追而不及，豈必伏罪哉！子復事矣。”（《呂氏春秋》離俗覧）（そこで〔息子は父の罪を詫び〕斧鑕に身を置いて王に死を請うた。すると王が言うには「〔父を〕追いかけても追いつかなかったのだから，どうして罪に服しなければならないことがあろうか。もとの職務に戻るがよい」）

13，壺子曰“追之。”列子追之而不及。（《列子》黄帝）（壺子は〔その男を〕「追え」と命じた。そこで列子は男を追ったが追いつかなかった）

ここでは“追之不及”と同じ意味を示すのに“追而不及”や“追之而不及”という表現が用いられている。これは当時の“追之不及”の語構造が密接な内部構造を有していなかったことを暗示する。さらに当時の“及”の他動詞性が高かったことも知られるので[3]，例えば上古漢語の“V死”を“V而死”の縮約形であると見なすのと同様に[4]，“追之不及”を“追之而不及”の縮約形と扱うのが合理的である。したがって，上古漢語の“追之不及”の内部構造は“追之＋不及”であり，これを二つの連語として扱うのであれば“追之，不及”と句読を付けることが可能であり，“追之不及”を一つの連語であると認めるのであれば，“追之”と“不及”の両成分が同価で並列された等立的連用構造を持つものと見なすことができる。

上古漢語における動詞連語の内部構造の緩さについては先行研究によってしばしば指摘されるところであり，例えば楊建国1959は“吾士氣少衰，而鼓不起者何也”（《漢書》李広伝）（我が軍の士気が少し衰え，進撃太鼓を敲いて鼓舞できないのはなぜだ）の“鼓不起”について，“鼓”と“不起”が等価で連用されたものでありながら，補語構造へ進もうとする萌芽的形態であると解している[5]。また蔣紹愚1995は“項籍少時，學書不成”（《史記》項羽本紀）（項羽は若い頃，字を習ったがうまくいかなかった）を例に取り，“學書”と“不成”が補語構造を構成する前段階にあると認めている[6]。

このように，こうした用法は上古漢語に少なからず存在することから，補語構造“V（O）不C”成立以前には補語構造でない“V（O）不v”が広く存在していたと推測できる。したがって上古

3　拙論2008で“及”の用法について触れた。

4　余健萍1957が“餓死”の発展過程を論じるにあたって“餓而死”を持ち出して以来，補語構造と疑わしき語の内部構造を検討するにあたって，“而”が中に割って入る現象を根拠にする論考は多い。呉福祥1999や趙長才2002など。

5　楊建国1959：44。なお楊建国が引く《漢書》例文の前半は諸本との間で異同があるので，北宋景祐本及び乾隆武英殿本に拠り訂正して引用した。

6　蔣紹愚1995：193。

漢語で使用される“追之不及”は，形態的には補語構造に繋がるものでありながら，その内部構造について見れば，“追之”と“不及”との間の結合度は極めて低いと言える。
やがて上古漢語の“追之不及”は中古漢語に引き継がれる。

14，程昱・郭嘉聞公遣備，言於公曰“劉備不可縱。”公悔，追之不及。（《三国志》武帝紀）（程昱・郭嘉は曹操が劉備を派遣すると聞いて，曹操に「劉備を自由にしてはなりません」と言った。曹操は悔やんだが，追いつかなかった）

中古漢語期は多くの動詞連語が補語構造を成立させ始めた時期であるが，この“追之不及”の内部構造について見れば，それはなお上古漢語の特徴を留めていると考えられる。というのは，例文14と同一の資料に以下の如き例が存在するからである。

15，禕出門馳馬而去，延尋悔，追之已不及矣。（《三国志》魏延伝）（費禕は門を出て馬に乗って去ると，魏延はすぐに後悔したが，追いかけても已に追いつかなかった）

ここに“追之已不及”が存在することから，《三国志》において“追之不及”の内部構造は“追之＋不及”であり，“VO”と“不及”とがなお密接な語構造を構成していない疑いがある。したがって，例文14の例を，完成された補語構造と見なすことに躊躇しなくてはならない。
類似の例は更に時代が下がった資料からも確認できる。例えば，以下のとおりである。

16，及去，有数百人追之，見域徐行，而衆走猶不及。（〈冥祥記〉）（〔域という男が〕行く時になると数百人がその男を追いかけたが，男はゆっくり進むようであるにもかかわらず，みんなが追いかけても追いつかなかった）
17，有人日能行数百里者，欲隨而験之，乃與俱，此人馳而不及。（〈冥祥記〉）（一日に数百里も行くことのできる者がいて，〔それが本当かどうか〕ついていって確認しようとしたところ，一緒に行くと，走っても追いつかなかった）

これらの例では，いずれも動詞と“不及”との間に副詞的または接続詞的成分Xが挿入され“V＋X＋不及”という構造になっている。一般に，可能補語構造形成期には否定形“V（O）不C”において“V（O）”と“不C”との間に副詞的または接続詞的成分の割って入ることがないわけではない。しかし“V（O）不及”の場合，時代が下っても，中間に副詞的成分や接続詞的成分の挿入される例が目立つ。この事実は，“V（O）不及”の内部において“不及”が動詞“V（O）”に馴染みにくく，補語としての結合を十分に具えていないことを示唆している。
つまり，中古漢語期の“V（O）不及”は，形態的には補語構造を形成したかの如き姿を呈しているものの，内実は“V（O）”と“不及”が即かず離れずの状態のままであったと言える。

3.2 「時間型」“VO不及”の成立過程

可能補語構造“V得及／V不及”がどのような契機で発生したかについて，その過程を文献から直接に求めることは難しい。しかし，関連句型の変遷を跡づけ，目立った変化が生じた際の言語環境に目配りすることで，新機能が成立する際に作用したメカニズムを推測することが可能であろう。そこで，“及”を伴う環境について振り返って確認すると，上古漢語には形態的には可能補語構造と同型を持った“VO不及”が存在していた。例えば，“列子追之不及”（例文11，《荘子》応帝王）がその例である。しかしほぼ同時代の資料に“追而不及”（例12，《呂氏春秋》離俗覧）や“追之而不及”(例文13，《列子》黄帝)という例が存在するからには，当時の“VO不及”の内部構造の結合度が低かったと考えられる。また，この頃の“及”の他動詞性が高かったことも知られるので，“追之不及”の内部構造は“追之”と“不及”が密接な結合を有せず，そのためこれを結果補語構造と認めることができない。

ところで上古漢語には“V＋及”という動詞連語が存在し，“入及庭”（例文１，《儀礼》燕礼）や“延及二三老”(例文２，《儀礼》聘礼)の如く使用された。しかし，その内部構造は結合度が低く，動詞の等立的連用であったと考えられる。“V＋及”が“V及”として結果補語構造を構成するのは，中古漢語期以降である。

中古漢語期になると，動詞連語の内部構造が変化し，補語構造を産出する力が機能するようになった。その結果，多くの動詞連語が結果補語構造を作り上げ，さらに可能補語構造を生み出した。そのため，こうした潮流の中で，“及”もまた可能補語構造を成立させるべく変化を始めつつあったと考えられる。この時，他の可能補語句形が産出される過程と同じく，否定形を内包する等立的連用構造に基づく連語を起源としたため，否定形可能補語の成立が肯定形に先んじた。

このように発生した中古漢語の“VO不及”は形態的には可能補語に接近していながら，その内実はなお“VO＋不及”のままであり，“VO”と“不及”との間に，語構造上の大きな断絶を残していた。その結果，“不及”は“VO”から切り離され易く，不安定な状態にあったと見ることができる。“走猶不及”（例文16，〈冥祥記〉）や“馳而不及”（例文17，〈冥祥記〉）は，この状況を反映したものであると理解できる。

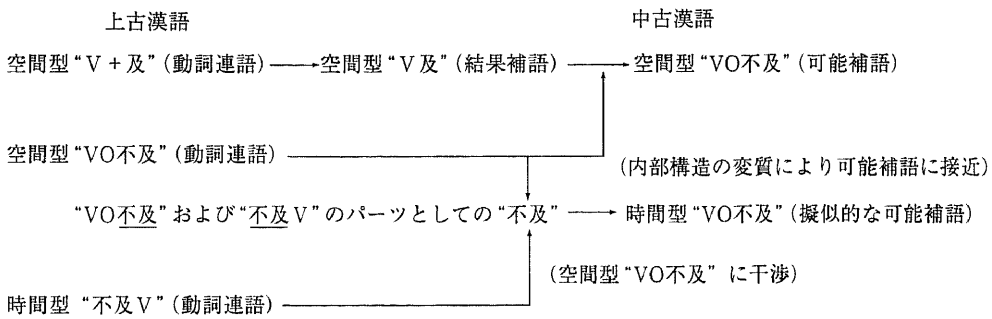
“VO不及”の内部構造が実は“VO＋不及”であり，“VO”と“不及”との間に結合度の緩さがあるとなれば，“VO＋不及”の後半の“不及”は遊離し，他の要素の干渉を受けやすい環境が発生する。この時，偶然にも，“VO＋不及”とパーツの一部を共有する別の句型が既に存在していた。すなわち，上古漢語期以来使用され続け，中古漢語期になって固定した句型を備えるに至った“不及V”である。この句型は“不及”を内包するという点において“VO＋不及”と共通性を備えており，また両者は共に可能を示すこともできた。その結果，中古漢語期における可能補語構造盛行の圧力のもとで，“VO＋不及”の内部構造のパーツの中で，結合度の低い“不及”は“VO”から切り離され，それが“不及V”の“不及”と混線を生じる条件が整うことになる。

こうして「空間型」機能しか有しない“VO＋不及”の“不及”が，「時間型」機能を持った“不及”によって置換されると，“VO＋不及”に新しい機能が生じることになる。すなわち，「時間型」“VO不及”の誕生である。

したがって，中古漢語の“VO不及”の機能についてその起源を尋ねれば，「空間型」結果補語構造“V及”に由来するものと，「時間型」連語“不及V”に基づくものとの二種類が存在することになる。前者は「空間型」“VO不及”であり，後者は「時間型」“VO不及”である。両者は形態的には同一なので，外見上は“VO不及”が二つの機能を備えているかの如き姿を呈する。

以上を図示すると次のようになる。

図1　形態から見た「空間型」“VO不及”と「時間型」“VO不及”の成立過程



以上の推測に合理性があることは，明代から清代にかけての“VO不及”の観察によって支持される。すなわち，可能補語構造否定形“VO不C”は近世漢語中期頃までに“V不CO”に変化したことが知られているが[7]，“VO不及”にはその交代時期に不均質性の存在する事実が確認できる。

18，以程子説細攷之，當初不是説不及此，只門人記録緊要處脱一兩字，便和全意失了。（《朱子語類》52）（程子の説によってこれを細かく検討すると，最初これに言い及ばなかったのではなく，ただ門人が大事なところを記録しようとして一・二字抜かしてしまい，そこですっかり意味がわからなくなったのだ）

19，孫大聖那知真假，也慮不及此，遂将扇子遞與他。（《西遊記》61）（孫悟空は，〔その猪八戒が〕本物か偽物か知らず，そんなことには思いも及ばず，扇を猪八戒に渡してしまった）

このように，「空間型」では早くから“V不及O”への交代が進んでいる。ところが「時間型」は明末や清代に至ってもしばしば“VO不及”の形態を残したままである[8]。

20，柳氏夢中聴得此言，猶如冷雨淋身，穿衣不及，駄了被児，就哭児哭肉的跑到女児房裡来。（《醒世恒言》9）（柳氏は〔事件が起きたという〕この言葉を聞いてまるで冷たい雨に濡れら

7　補語（C）の種類によって些か異なるが，李思明1992：52が示す表に拠れば，“VO不得”の場合は宋代から明代の間に“V不得O”に交代し，楊建国1959：45に拠れば，“VO不C”全般については明代から消滅に向かい，現代語型“V不CO”に入れ替わったとされる。

8　よく知られているように，《三言》に含まれる作品の成立年代は一様ではない。佐藤1988：38は，以下で引用する例文20の出処である《醒世恒言》9巻について，馮夢龍（すなわち明末）の創作と推定する。

れたみたいに驚き，服を着るのも間にあわず，布団を体にかけたまま，大事な人がたいへんなことになったと泣き叫びながら娘の部屋に駆け込んできた）

21，怪船家手裏還捏着櫓，一鐵尺打去，船家抛櫓不及。（《初刻拍案驚奇》８）（〔海賊は〕船頭がまだ櫓を手に持っているのを見咎めて，鉄の武器を打ち込むと，船頭は櫓を捨てるのも間にあわなかった）

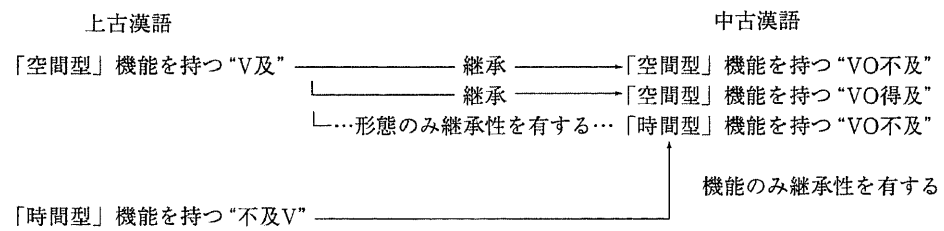
22，一日防他不及，連材帯凳推倒地下，把材底打開，臭得那一村人家怨天恨地，要捉他去送官。（《醒世姻縁伝》25）（〔棺桶に入っている父親の遺体をどうしても見ようとする男がいて〕ある日，彼を制止するのが間にあわなかったため，彼は棺桶をその置き台ごと地面にひっくり返し，棺桶の底に穴を空けてしまったので，村人達は臭くてたまらず，彼を捕まえて役所に送ろうとした）

「空間型」が早くから近世形に移行しているにもかかわらず，ひとり「時間型」のみが明末や清代においてなお古形を保存しがちであるという事実は，内部構造の点で，「空間型」と「時間型」との間に異質性が存在していることを示す。これはとりもなおさず，「時間型」“VO不及”においては明末に至っても，“不及”がＶとの結合力を十分に備えていないことを暗示するものであり，“不及”が外部由来のものであることを示唆する。

以上から，「時間型」“VO不及”の成立に“不及Ｖ”が関わったと推測するのは，合理性を失わない。

そこで，結果補語構造“Ｖ及”と可能補語構造“Ｖ得及／Ｖ不及”との間に見られる機能の継承関係について，図１で示した表をさらにまとめ直すと，以下のように図示できる。

図２　機能から見た「空間型」“VO不及”と「時間型」“VO不及”の成立過程



4　“Ｖ得及／Ｖ不及”に関するもう一つの競合

以上に示したように，「時間型」“VO不及”は，同じく時間機能を有する“不及Ｖ”と混線を生じつつ使用された結果，両句型は共存し，近世漢語期までには競合関係を生じることになる[9]。例えば“不及Ｖ”の句型を持つ“不及措手”と“VO不及”の句型を持つ“措手不及”が共に使用される時期を経て，やがて前者が駆逐され，後者が保存されることになった。しかし“措手不及”は現代漢語になお残っているものの，現代人の語感から言えば文言臭を残した書面語に過ぎない。

9　“ＶＯ不及”と“不及Ｖ”との競合関係については，拙論2008で詳述した。

「空間型」であれ「時間型」であれ，補語としての“及”は既にその役割を終え，生産性を失っているからである。現代漢語になお保存される“V及”および“V得及／V不及”としては，“涉及”“来得及／来不及”“等得及／等不及”などわずかな例にとどまる。

では，“及”が早くから生産性を失い，現代漢語にまでその命脈を永らえることができなかった背景には，どのような興亡の過程があったのであろうか。以下にその概略を眺めてみたい。

“及”を含む補語構造を考える際，すぐに想起されるのは鄭玄の次の言葉である。

23，“及，至也”（例文１の《儀礼》燕礼に付く鄭玄注）

鄭玄に拠れば「及」は「いたる」である。実際，“入及庭”（例文１）はそのまま“入至庭”とすると些かでも古めかしさが減少するし，さらに“至”を口語の“到”に変えて“延及二三老”（例文２）を“延到二三老”と言えば現代漢語に近づく。

そこで“V及”が補語構造としての内部構造を十分に備えた時期の用例を観察すると，用法上“V及”と“V到”との距離が極めて近いことに気づく。

24，曰“昇後如何？”師曰“慈雲普覆，潤及大千。”（《景徳伝灯録》19）（「〔龍が龍門を通って〕天に昇った後はどうなるのですか」「慈雲が広く覆い，大千世界を潤すのだ」）

25，僧衆聞之大駭，法本領被傷者，行来見夫人，説及賊事。（《董解元西廂記》2）（僧達は〔盗賊の言葉を〕聞いて大いに驚き，法本は傷ついたものを連れて夫人に会い，盗賊が来たことを話した）

“V及”は「空間型」機能しか持たないだけに，“V到”と一義的に対応し，これらの“潤及”“説及”は現代漢語の“潤到”“説到”に置換できる。同様に，“V得及／V不及”のうち「空間型」の例はしばしば現代漢語の“V得到／V不到”に相当する。

26，或問鬼神有無。曰“此豈卒乍可説。便説，公亦豈能信得及？”（《朱子語類》３）（ある人が鬼神の有無を問うた。師が答えて言うには「これは軽々しく言うことができるだろうか。たとえ言っても，信じることができるだろうか」）

27，無善無不善，性原是如此，悟得及時，只此一句便盡了。（《伝習録》下）（善もなく不善もなく，人の性はもともとこのようであるから，このことに気づきさえすれば，この一言で尽きてしまう）

これらの“信得及”“悟得及”は，意味と形態に基づき強いて現代漢語に近づければ“信得到”“悟得到”に相当する。このように，“V得及／V不及”と“V得到／V不到”は機能の点で極めて接近した関係にある。

そこで，“V得及／V不及”と“V得到／V不到”の使用状況を作品別に調べてみると，以下の

ような結果を得ることができる。

表3　「空間型」の“V得及／V不及”と「空間型」の“V得到／V不到”の使用例数

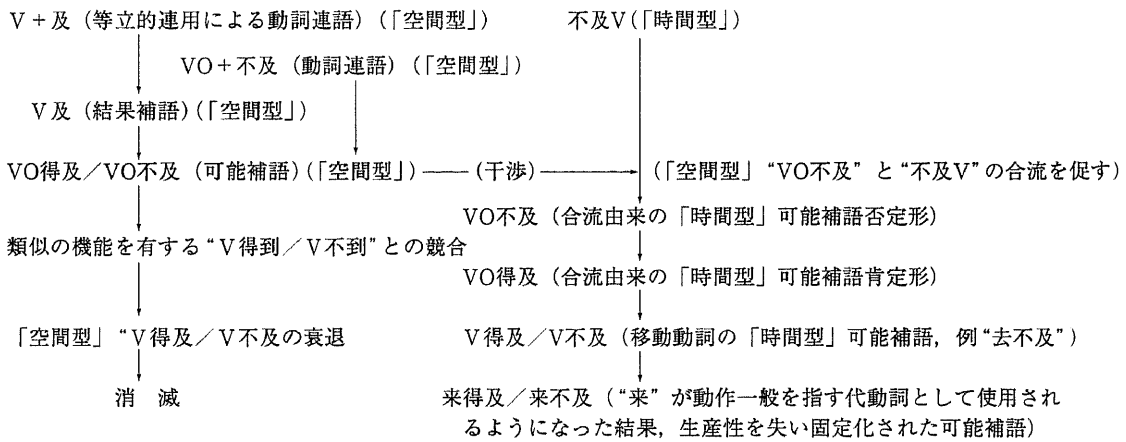
	「空間型」の“V得及／V不及”	「空間型」の“V得到／V不到”
二十回本《搜神記》（六朝）	4例	0例
《董解元西廂記》（金）	2例	2例
四十回本《平妖伝》（明）	6例	12例

但しこの表を読むにあたって注意すべき点がある[10]。それは“V得及／V不及”の賓語には名詞や代名詞を伴うことが可能だが，“V得到／V不到”の賓語としては場所詞しか用いられないという点である。“V得到／V不到”が名詞や代名詞を賓語として後置できるようになるのは，明末以降に限られる[11]。したがって，この表に計数されている“V得到／V不到”には名詞を賓語にした例は含まれない。にもかかわらず明代作品において多数の「空間型」の“V得到／V不到”が用いられる事実は，当時の“V得到／V不到”の圧倒的な優勢を物語る。

このように，「空間型」“V得及／V不及”は，類似の機能を持った“V得到／V不到”の普及に時を合わせるかのように衰退を示すようになる。一方，“V得到／V不到”によって駆逐されずに済んだ「時間型」“V得及／V不及”は，やがてその全盛期において内部に採用する動詞の範囲を拡大させ，ついに“来得及／来不及”を生み出すに至る[12]。

以上について，縦方向を時間軸にして整理すると，次のように図示することができる。

図3　“来得及／来不及”の成立過程



10　四十回本《平妖伝》の一部は二十回本《平妖伝》と一致し，両者の成立時代は些か異なる。しかし，両者は共に明代の言語を反映しており，“V得及／V不及”と“V得到／V不到”の使用状況に限れば，両者の間に同傾向を認めることができる。そこで，量的に大部の四十回本を採用して計数した。

11　拙論2002。なお，明代の「V到」は空間的到達以外に時間的到達をも示すことができる。しかし「V及」と異なり，その否定形は「間にあうことができない」という意味を示さない。そのため，ここでは「V到」の否定形を考慮する必要はない。

12　“来得及／来不及”が産出される過程については，拙論2007で詳しく述べた。図3を読むにあたって，拙論2007をも参照されたい。

5　終わりに

現代漢語の“来得及／来不及”が「間にあう／あわない」という意味を持つのは，旧白話の“V得及／V不及”が有する「時間型」機能に基づくので，小論では“来得及／来不及”の成立過程を明らかにするにあたって，この句型が「時間型」機能を備えるに至る過程を中心に検討した。そのため，それと現代漢語の“来得及／来不及”との関係については紙幅の関係で十分に触れることができなかった。そこで以下では視野を現代漢語期にまで拡大し[13]，整理を加える。

“来得及／来不及”の起源に関して形態に基づき語法史を遡れば，“V得及／V不及”を経て上古漢語の“V及”にまで遡ることができる。しかしこれらの“V及”や“V得及／V不及”は，本来「空間型」機能しか持たず，「時間型」機能を備えていないものであった。そのため，機能に関して言えば，初期の“V及”や“V得及／V不及”は“来得及／来不及”と継承関係を持たない。したがって，“V及”は“来得及／来不及”の直接的な原型ではない。

上古漢語の“V＋及”の語構造は動詞の等立的連用であり，補語構造と認めることはできない。同様に，“V得及／V不及”について見ても，肯定形より先に成立した否定形の“V不及”は上古漢語の“VO＋不及”を原型に持つだけに，当初は可能補語構造を有していなかった。この特性は中古漢語期に至っても保存され，“VO＋不及”の内部構造は“VO”と“不及”との間の結合度が低いままであり，その結果，“不及”は“VO”から遊離しがちな状況にあった。

中古漢語期になって“VO＋不及”が擬似的ながらも可能補語構造へ向けて変化を始めた頃，「時間型」機能を持つ“不及V”も多用され，その句型を固定化し始めていた。この句型は「～に間にあうことができない」という表現が求められる際に好んで使用され，可能を示す語を句型内部に含まないにもかかわらず，可能に近い意味を持つことのできるものであった。そのため，機能と形態の両面において“不及V”は“VO＋不及”と共通性を高め，両者は混線を生じるようになった。その結果，本来「空間型」機能しか有しない“VO＋不及”は“不及V”から「時間型」機能を取り込み，かくて“VO＋不及”は「空間型」機能と「時間型」機能の両方を身につけた。

こうして中古漢語の“VO不及”は「空間型」機能と「時間型」機能の二つを備えると共に，可能補語構造盛行の潮流の中で，その内部の結合度をしだいに高め，肯定形も作り上げることで“V（O）得及／V（O）不及”を成立させた。ところが，近世漢語期になると，そのうちの「空間型」機能のみが衰退を示し始める。この時，“及”とほぼ同等の機能を持つ口語系の“到”が白話文体で盛んに用いられるようになり，“V得到／V不到”の使用例が増加する。そのため，「空間型」“V得及／V不及”の衰退の背景には，“V得到／V不到”の興隆があったと推測できる。

一方，「時間型」“V得及／V不及”は機能の点で衝突が生じないため，“V得到／V不到”との競争に巻き込まれることなく，そのまま用いられ続け，明代末期に至ると，使用頻度や用法の広さの点で頂点に達する。その結果，この句型で採用される動詞がこれまで以上に拡大され，移動動詞

13　“来得及／来不及”の現代漢語期に至るまでの姿については、拙論2007および拙論2008で詳述した。行論上の必要から、本章後半ではその一部を再述する。

までもが「時間型」“Ｖ得及／Ｖ不及”に取り入れられ，“去不及”や“来不及”が発生する。発生の当初，これらは「(時間的に）～へ行くのに間にあわない」や「(時間的に）～へ来るのに間にあわない」という意味で使用されていた。しかし間もなく，“来不及”の“来”が代動詞として機能するようになり，「～へ来るのに間にあわない」ではなく「～をするのに間にあわない」という意味として使用されるようになった。こうして“来不及”が一般の動作を広く指す機能を持つようになると，個別の動詞に対応して用いられてきた“Ｖ得及／Ｖ不及”は，その役割を終える。そのため，清代以降，“Ｖ得及／Ｖ不及”はそれまでの勢いを失い，民国時代を迎えるまでには，“来得及／来不及”および少数の例外的な表現(例えば“等得及／等不及”)を除いて，“Ｖ得及／Ｖ不及”の句型を備える表現が姿を消した。

現代漢語において，“来得及／来不及”が常用されるにもかかわらず，“来及”の使用が許されないのは，“来及”が“来得及／来不及”の機能上の所謂原型になりえないからである。現代漢語の環境において，“来得及／来不及”の語形に基づき，強いて“来及”を生み出す操作を行っても，可能補語構造“来得及／来不及”(「時間型」機能を有する)と結果補語構造“来及”(「空間型」機能を有するものとして想定されることになる)との間で機能上の不整合性が生じ，“来及”は理解不能の表現となる。

“来得及／来不及”が所謂原型として“来及”を持ち得ないのは，中古漢語期において“Ｖ不及”が“不及Ｖ”と機能上の混線を生じた結果，“Ｖ不及”本来の機能を失ったためである。

以上の変遷過程で認められた“VO不及”の内部構造の変質過程は，上古漢語期から中古漢語期にかけて，否定形を含む動詞連語が可能補語を形成する上で示す典型的なパターンの一部でもある。

参考文献

伊原大策2002　結果補語“Ｖ到”における「移動」と「目的の達成」，『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究成果報告書（平成13年度)』Ｖ(PART1)

伊原大策2007　可能補語「来不及」の起源に関わる二つの「Ｖ不及」，《集刊東洋学》98

伊原大策2008　“来不及”句型と“不及来”句型，《中国文化》66

岳俊発1984　“得”字句的産生和演変，《語言研究》1984-2

呉福祥1999　試論現代漢語動補結構的来源，《漢語的現状与歴史研究》，中国社会科学出版社

佐藤晴彦1988　《醒世恒言》における馮夢龍の創作（Ｉ)，《神戸外大論叢》39-6

蔣紹愚1995　内部構擬法在近代漢語語法研究中的運用，《中国語文》1995-3

趙長才2002　能性述補結構否定形式“Ｖ(O)不得”與“Ｖ不得(O)”的産生和発展，《漢語史研究集刊》5，巴蜀書社

潘允中1980　漢語動補結構的発展，《中国語文》1980-1

楊建国1959　補語式発展試探，《語法論集》３，中華書局

余健萍1957　使成式的起源和発展，《語法論集》2，中華書局
李思明1992　晩唐以来可能性動補結構中賓語位置的発展変化，《古漢語研究》1992-4

小論は，特に注記した部分を除くと，《儀礼》《春秋左氏伝》《荘子》《呂氏春秋》《景徳伝灯録》は四部叢刊，《史記》《漢書》《三国志》は百衲本，〈宣験記〉〈冥祥記〉は魯迅全集所収《古小説鉤沈》，二十回本《捜神記》《捜神後記》《酉陽雑俎》は学津討原，敦煌変文は《敦煌変文集新書》，《朱子語類》は明刊日中合璧本，《伝習録》は王文成公全書，《董解元西廂記》は嘉靖本，《初刻拍案驚奇》は尚友堂刊本，『西遊記』は世徳堂本，『醒世恒言』は葉敬池刊本，四十回本《平妖伝》は内閣文庫蔵泰昌元年刊本，『醒世姻縁伝』は同徳堂本をそれぞれ使用した。